

## ⇒ 論 説 ‹

## 『ハムレット』 4幕4場のフォリオ版の削除部分に関する一考察

辻 照 彦

## はじめに

『ハムレット』には、Second Quarto (Q2) にのみ見られ、First Folio (F) には欠落している passages や lines がいくつかあるが、4幕4場のものは50行を超える最長のものである。不思議なことに、冒頭のフォーティンプラスがノルウェー軍部隊を率いて入場してくる部分だけを残して、それに続く、ハムレットと隊長とのダイアローグとその後のハムレットの独白がFでは削除されている。Fのカットについては、それが偶然のものか意図的なものかがまず問題となるが、4幕4場のカットについては、その分量の多さからして、偶然の欠落と考える研究者は皆無と言ってよい。しかし、研究者たちが合意できるのはそこまでで、意図的な削除の時期、主体、さらにその動機といった問題点に関しては、諸説紛々というのが現状である。

例えば John Dover Wilson は、Fのカットは上演の都合のためのものだとし、このカットにより、58行分の台詞と Barbadge のかなりの息の量が軽減されていると指摘している。ハムレットの独白は後で追加されたものではないかという考えに対して Wilson は、フォーティンプラスのシーンは、後の独白につながるきっかけを与えるために書かれたことは明白であり、また、フォーティンプラスのシーンが First Quarto (Q1) に残っていることを考えると、行進シーンと独白は、最初から完全なテキストに含まれていたものであり、他方、独白の部分は上演台本から最初から削除されていたと考えられると述べている<sup>1)</sup>。

Harold Jenkins も Dover Wilson と同様、Fのカットをシェイクスピア自身による改訂とする見方に慎重だが、4幕4場に関しても、シェイクスピアが意図した独白の重要な機能が失われてしまっていると述べて、作者による改訂という考えを否定している。プロットに影響しない箇所を削除するFの全般的傾向に合致していることや、劇の後半に頻出していることを考えると、上演用の短縮という印象が強いと述べている<sup>2)</sup>。

これに対して、4幕4場の削除を作者自身の改訂と考える G. R. Hibbard は、カットされた部分は戦争とその原因を論じることにより、この悲劇の思索的側面を拡大するという面を持つが、それはアクションを前進させもしなければ、ハムレットや彼の心理状態について何も新しい事実を明らかにしないと述べている。さらに、2幕2場以降に様々なことが起きたが、ハムレットは今もその時の場所に留まり続けていると述べた上で、4幕4場の独白は失敗の告白であり、我々が見てきたことを要約しているもので、今更復讐の決意を見せられても信用できな

いと言って、4幕4場の独白の場違いさを指摘している<sup>3)</sup>。

このように、Fのカットに関しては見解が大きく分かれており、それぞれの主張は平行線をたどっていると言える。本論では4幕の3場、4場、5場を中心に、ハムレットの出国情報に注目しながらQ1、Q2、そしてFのテキストを比較検討し、Fの削除の時期とその性質に関して検討してみたいと思う。

### 削除の時期に関する Greg の見解

4幕4場のカットの時期と、エリザベス朝の上演時にカットされていたのかどうかという問題に関しては W. W. Greg が興味深い指摘をしている。Greg は4幕4場のカットを他のカットと特徴が異なると考え、最も意外なカットと見なしている。さらに遅い時期のカットと見られると述べて、その理由として、削除された行が Q1 と *Der Bestrafte Brudermord* (BB) に痕跡を残していることを挙げている。そのことから Greg は、カットされた部分は最初上演台本に含まれていたのであり、シェイクスピア自身がその削除に関係していたと考える必要はないと述べている<sup>4)</sup>。

Q1に残された痕跡は4幕4場のフォーティンプラスの台詞の中に見られる。Fではその台詞は次のようになっている<sup>5)</sup>。

Go, Captain, from me greet the Danish King:  
Tell him that by his licence Fortinbras  
Claims the conveyance of a promised march  
Over his kingdom. You know the rendezvous.  
(4.4.1-4)

一方 Q1 ではフォーティンプラスの台詞は次のようになっている<sup>6)</sup>。

Captain, from us go greet the king of Denmark.  
Tell him that Fortenbrasse, nephew to old Norway,  
Craves a free pass and conduct over his land,  
According to the articles agreed on.  
(12.1-4)

Q1の台詞の中の‘nephew to old Norway’という表現はFには見られず、Fでカットされたシーン中、ハムレットにノルウェー軍を指揮しているのは誰かと質問された隊長が答える台詞の中に出てくるものである。Q2では正確には、‘The nephew to old Norway, Fortinbras’となっ

ている。

BBに残された痕跡というのはFでカットされたハムレットの独白の最後に出てくる、‘from this time forth’という表現である。この表現の痕跡がBBの2幕9場の次のようなハムレットの台詞の中に見られるという<sup>7)</sup>。

Come, Horatio, I am going; and from this hour I shall endeavor to find the King alone,  
that I may take his life as he has taken my father's.

Q2の‘from this time forth’とBBの類似表現はそれぞれ劇の異なるシーンに出てくるが、どちらもハムレットがクロードィアスに対する復讐の決意を表明するシーンに出てくるとして、Gregはコンテキストの類似性を指摘している<sup>8)</sup>。

Gregの主張に最も詳細な反論を試みたのはJ. M. Nosworthyである。NosworthyはBBの痕跡を疑問視する。2つの表現は劇の異なる場所に登場し、一方は独白の中で、もう一方はダイアログの中で使用されていると述べて、どちらもクロードィアス殺害の意図を述べるハムレットの台詞の中に出てくるという事実は、それがこの劇の主要なモチーフであることを考えるとほとんど重要性を持たなくなるとして、Gregの主張の根拠の希薄さを指摘している。さらにNosworthyは、Q2の‘from this time forth’という表現は、BBの‘von dieser Stund an’というオリジナルの表現の正確なパラレルと見なすことはできないと主張している<sup>9)</sup>。

Nosworthyは、Q1の‘Fortenbrasse, nephew to old Norway’という表現についても、グローブ座上演のためのrevisionと考えた方が説明しやすいと主張する。Fの1幕2場28行目の‘Norway, uncle of young Fortinbras’という説明を普通の観客が4幕4場まで覚えているとは考えにくいので、Fではフォーティンプラス登場の際の説明が不十分と考えたシェイクスピアが再確認として説明を追加したものと推測するのは不合理ではないとNosworthyは述べている<sup>10)</sup>。

Fでは欠落しているが、Q2と似た表現がQ1に見られるという4幕4場に似たケースが『ハムレット』には他に2つある。1つ目はQ2版1幕2場58行目からの‘He hath, my lord, wrung from me my slow leave / By laboursome petition,’というポローニアスの台詞である<sup>11)</sup>。この台詞はFでは‘He hath, my lord.’となっており後半部分が欠落しているが、Q1では‘He hath, my lord, wrung from me a forced grant,’(2.22)となっている。後半部分の表現はかなり異なっているように見えるが、‘wrung from me’という表現の一致は、Q2の台詞が上演台本に含まれていた証拠として十分説得力を持つだろう。2つ目はQ2版4幕3場26行目からの‘A man may fish with the worm that hath eat of a king and eat of the fish that hath fed of that worm.’というハムレットの台詞である。この台詞はFではすべて欠落しているが、Q1では‘Look you, a man may fish with that worm that hath eaten of a king, and a beggar eat that fish which that worm hath caught.’(11.128-130)というQ2に極めて似た表現で残っている。これ

ら2つのケースは劇中の同じ場所で起きているので、Fで欠落している原因を偶然のものと考えるか意図的なものかと考えるかは別にして、欠落している台詞が上演台本に含まれていたことを疑う研究者はいないだろう。これらのケースに比べると4幕4場のGregが指摘する痕跡の説得力はQ1のものもBBのものも弱いと言わざるを得ないだろう。したがって、それを前提としてGregが下した、4幕4場のカットは上演台本完成後の比較的遅い時期に行われたという結論も重要な根拠を失うことになる。

### ハムレットの出国に関する情報

『ハムレット』4幕4場のFのカット部分に関しては、最後の独白が、この時点のハムレットの独白として適切かどうかという問題に注意が向けられがちである。しかし、カット部分には観客が、ハムレットがデンマークから出国したという事実を最終的に確認するという重要な機能も与えられている。ローゼンクランツとギルデンスターンに先導されてハムレットが退場するとき、観客はハムレットがクローディアスの計画通りに港で待っている船に乗船し、イングランドに向けて出港したことを確認することが期待されているからである。

Q2では、ハムレットの出国に関する情報の大きな流れとしては、4幕3場でハムレットがクローディアスからイングランドへの追放を宣告され、4幕4場で出国し、そして4幕5場で出国が再確認されるという構成になっている。このうち、ハムレットの出国が再確認される場所というのは、4幕5場のシーンがかなり進み、オフィーリアの狂乱した姿を見てショックを受けたクローディアスがデンマーク王室に立て続けに起こる不幸を説明的に並べ立てる所である。それは77行目からの次のような台詞で始まる。

O Gertrude, Gertrude,  
 When sorrows come they come not single spies  
 But in battalions: first, her father slain;  
 Next, your son gone, and he most violent author  
 Of his own just remove; the people muddied,  
 Thick and unwholesome in thoughts and whispers  
 For good Polonius' death, and we have done but greenly  
 In hugger-mugger to inter him; poor Ophelia  
 Divided from herself and her fair judgement,  
 Without the which we are pictures or mere beasts;  
 Last, and as much containing as all these,  
 Her brother is in secret come from France,  
 Feeds on this wonder, keeps himself in clouds

And wants not buzzers to infect his ear  
 With pestilent speeches of his father's death —  
 Wherein necessity, of matter beggared,  
 Will nothing stick our person to arraign  
 In ear and ear.

(4.5.77-94)

この不幸リストの中でハムレットの出国は1行半で説明されており、ポローニアスが殺されたことよりは長い、今見たばかりのオフィーリアの狂気よりも短い、極めて簡潔なものになっている。これはQ2のように4幕4場のハムレット出国のシーンがあれば当然のことである。引用の最後に、レアティーズが秘密裏にフランスから帰国し、父の死に関してクローディアスを非難する様々な噂を吹き込まれているという説明が続くが、この最後の災難は新情報であり、約8行を使って説明されている。

このように、4幕5場に見られるハムレット出国の再確認は、そもそもかなりシーンが進んだ後に登場し、さらに他の情報と一括りにされて、すでに確認済みの事実の再確認程度の極めて簡潔なものになっている。このような状況で、Fのように4幕4場の出国シーンを削除してしまうとどうなるだろうか。仮に、4幕4場でしか出国を確認することができないとすると、その削除により観客はハムレット出国の最終確認ができなくなり、しかも、Fの4幕5場は基本的にQ2と同じなので、観客は、ハムレットの出国を最終確認する機会を奪われたまま、オフィーリアの狂気を見せられ、その間ハムレットの出国に関して、宙ぶらりんな状態に置かれることになる。そして、やっとハムレット出国の話題が出てきた時には、観客はすでに確認済みの事実であるかのような短い説明を聞かされることになるのである。

4幕3場の追放シーンでハムレットの出国まで最終確認できれば問題ないが、4幕3場の追放宣告シーンは、観客にハムレットの速やかな出国を確信させるように描かれているとは言い難い。4幕3場におけるハムレットは確かに逮捕された身ではあるが、狂気を装いながらも、一貫して挑戦的である。ハムレットはシーンの冒頭でポローニアスの死体の隠し場所を尋ねられると、容易に白状せず、天国で見つからなければ、自分で反対側、即ち地獄を探してみるようにクローディアスに勧める。さらに、イングランド追放を宣告された時にも、クローディアスの計画を見破っていることを暗示し（‘I see a cherub that sees them.’）、辞去する際にも、‘Farewell, dear mother.’と言って最後までクローディアスを困惑させている。このような挑戦的なハムレットの態度を見せられた観客は、ハムレットが‘Come, for England!’と学友に呼びかけて退場する時、彼がおとなしくデンマークを出国することまで確認できるだろうか。

ハムレット退場直後のクローディアスの台詞も、観客にハムレットの迅速な出国を確信させるものとは言い難い。1人で退場するハムレットを見てクローディアスは、ローゼンクランツとギルデンストーンをはじめとする側近に次のように命じる。

Follow him at foot.

Tempt him with speed aboard.

Delay it not — I'll have him hence tonight.

Away, for everything is sealed and done

That else leans on th'affair. Pray you make haste.

(4.3.51-55)

この台詞から一番伝わってくるのは、クローディアスのハムレット出国に関する確信ではなく、むしろ焦燥感や不安感なのではないだろうか。しかも、「素早く乗船する気にさせろ」と命じられている中心人物は、これまで何回かハムレットに手玉に取られてきたローゼンクランツとギルデンスターンなのである。

この台詞の後、自分以外全員退場したところで、クローディアスはイングランド計画がハムレット殺害計画であることを初めて明かす。イングランド王への親書の中身はハムレットの処刑（‘The present death of Hamlet’）であることを述べて、次のように締めくくる。

Do it, England!

For like the hectic in my blood he rages

And thou must cure me. Till I know 'tis done,

Howe'er my haps my joys will ne'er begin.

(4.3.63-66)

この台詞からも、ハムレットという疫病から一刻も早く解放されたいというクローディアスの焦燥感やハムレットに対する恐怖に似た感情はよく伝わってくる。しかし、この最後の独白も、観客にハムレットの出国を確信させてくれるものにはなっていない。むしろ、デンマーク出国はほとんど処刑と同じ意味を持つことを伝えられた観客は、本当にクローディアスの思惑通りにハムレットがおとなしく出国するかどうかに関心を向けるのではないだろうか。4幕4場はそれを最終確認させてくれるシーンなのである。そのシーンにFのように削除が施されると、ハムレット出国の最終確認が欠落した状態のまま、短いフォーティンプラスの行進を挿んで、4幕3場の追放シーンから4幕5場の出国再確認のシーンへと進んで行くことになる。Fの削除が何か違和感を与えるとすれば、ハムレット出国に関するこの曖昧さがその最大の原因と言えるだろう。

## Q1の変更点

ハムレットが完全に拘束された身であること、国王の命令は絶対であること、さらに、ハムレットの挑戦的な態度は、その狂気を強調したいクロードィアスにとってはむしろ好都合であることを考えると、Fのように出国シーンが削除されても、観客はハムレットが命令通りすぐにイングランドへ出発することを理解できると思われるかもしれない。また、ハムレット追放計画は、3幕1場以来繰り返し紹介されており、クロゼットシーンにより観客はハムレットがイングランド行きを覚悟していることも既に知っている。だから、4幕4場の前後だけに注目して、出国の最終確認が欠如していると考えべきではないと反論されるかもしれない。しかし、Q1にはハムレット出国の情報に関して興味深い変更が見られる。

Fでカットされている比較的長い passage はQ1でもカットされていることはよく知られている。Q1では4幕4場に関しても、Fと同様冒頭のフォーティンブラスの行進場面を除いてすべてカットされている。しかし、その直後のシーン、即ちQ2の4幕5場に当たるシーンが、Q1ではQ2やFと異なっている。最大の違いは、そのシーンの冒頭で、ハムレットの出国が話題として取り上げられていることである。King は Gertred と共に入場し、次のように言葉を交わす。

King        Hamlet is shipped for England; fare him well.  
               I hope to hear good news from thence ere long,  
               If everything fall out to our content,  
               As I do make no doubt but so it shall.

Gertred     God grant it may. Heavens keep my Hamlet safe!  
               But this mischance of old Corambis' death  
               Hath piercèd so the young Ofelia's heart  
               That she, poor maid, is quite bereft her wits.

(13.1-8)

ここでは、ハムレットがイングランドに向けて出発してしまったことと、ポローニアスに当たる Corambis の死亡、そしてオフィーリアの発狂が説明されている。さらに、Gertred の台詞の後で King は、レアティーズがフランスから帰国したことを5行にわたって説明するので、ここはQ2やFの不幸リスト（4幕5場77行目）に相当すると考えてよいだろう。実際、Q1では、レアティーズ入場直前の場所から不幸リストは消えている。

Q1の不幸リストはQ2やFの不幸リストとはいくつかの点で異なっているが、最大の違いは、ハムレットの出国が不幸リストの最初に置かれていることである。さらに、ハムレット出国への言及部分はQ2やFよりも長くなっている。レアティーズの説明はQ2やFの8行から

5行（最初の1行は間投詞と接続的表現なので実質4行）に縮小されているのに対して、ハムレットに関する説明はQ2やFで1行半だったものが、Q1では5行へと増加している。

さらにQ1のハムレット出国への言及部分はオフィーリアやレアティーズに関する説明と違って、必ずしも不幸な出来事の1つのように語られてはいない。とりあえずハムレットをイングランドに向けて出港させることに成功して、少し安堵したような雰囲気さえ感じられ、Q2の不幸リストに見られるハムレット出国の説明とは明らかにニュアンスが異なっている。引用文中の‘But’が示しているように、ハムレット出国の説明は、不幸リストの前に少し強引に追加されたもののように感じられる。

Q1の台詞の表現が上演された時のものをどこまで正確に再現しているかは分からない。しかし、ここはシーンの冒頭なので、KingとGertredが登場して、最初にハムレットの船旅の無事を祈る台詞を交わした可能性は比較的高いと考えられる。Q1は、4幕3場については、FやQ2に準じている。細部には違いも見られるが、追放宣告、ハムレットと側近の退場、クロウディアスの独白といった流れは同じで、全体的に見ると、Q2のシーンはQ1で比較的忠実に再現されている<sup>12)</sup>。また、4幕4場に関しては、先述したように、Q1は、フォーティンプラスの行進部分だけを残して残りをカットするという、Fの一見不可解な削除を踏襲している。つまり、4幕3場から4幕4場にかけては、Q1は基本的にはFと同じ流れになっているのである。しかし、それにもかかわらず、4幕5場の冒頭にQ1はQ2やFには見られない台詞を追加しているのである。

Q1の4幕5場に当たるシーンの冒頭にKingとGertredがハムレットの無事を祈る台詞が加えられたのはなぜだろうか。もちろん、表面的にはハムレットの無事を祈りながらも、裏でその処刑を待ち望んでいるKingの悪辣さを強調するためでもあったかもしれない。しかし、一番の理由は、シーンの冒頭で、ハムレットの出国をはっきり観客に確認させるためだったのではないだろうか。Q1の基となった台本の制作者は、4幕4場をFのようにカットすると、ハムレット出国の情報が曖昧になり、その結果、エピソードの区切りも曖昧になってしまうことを認識していたのではないだろうか。そして、台本制作者はカットによって生じた情報面での影響を最小限に収めるために、補足説明的な台詞を次のシーンの冒頭に追加し、それによって4幕4場のカットのほころびを可能な限り早い段階で補修しようと試みたのではないだろうか。

Q1の基となった台本の制作者は、不幸リストをシーンの冒頭に移動することにより、ホレイショとGentlemanのパートを省略している。これは、Gentlemanを省略し、その台詞をホレイショに割り振ったF以上に上演上の節約志向が働いていたことを示している。その台本制作者が、わざわざシーンの冒頭に、Q2やFにはない、KingとGertredがハムレットの無事を祈る台詞を加筆したのである。このことは、台本制作者が、4幕4場のカットの影響を、看過できないほど重大なものと認識していたことを示しているのではないだろうか。



## むすび

本論では『ハムレット』4幕の3場、4場、5場を中心に、ハムレットの出国情報に注目しながらQ1、Q2、そしてFのテキストを比較検討してみた。Fに見られる4幕4場の削除部分に関して、それはハムレットがデンマークを出国することを確認するためのシーンでもあり、それが削除されると、観客はハムレットの出国を最終的に確認する機会を奪われてしまうことを指摘し、Fと同様4幕4場の大部分を削除したQ1では、4幕5場に当たるシーンの冒頭にハムレット出国の話題を置くことによって、削除された情報を補足する工夫が施されている可能性があることを示した。

仮に本論の主張のように、Q1の基となった上演台本がFの4幕4場のカットをそのまま踏襲しながら、一方で、それによって生じる不都合を解消するための変更を加えていたのだとすると、Fの4幕4場のカットが行われたのは台本準備の前ということになる。Edwardsは、book-keeperが、シェイクスピアのマニュスクリプトを上演台本準備のために清書し、このfair-copyがFの印刷原稿となったという仮説を立てている<sup>13)</sup>。4幕4場のカットに関する限り、Edwardsの仮説は妥当性を持っているように思われる。また、4幕4場のカットと4幕5場の改修はほぼ同時期に、同一人物によって行われたと考えるのが妥当だろう。カットのみをシェイクスピアが行い、台本準備の際の改修はbook-keeperが行ったと考えることもできるが、その場合にも、シェイクスピアは後で改修が施されることを承知の上でカットしたと考えるべきではないだろうか。book-keeperが気付くような情報の欠如やエピソードの区切りの悪さに作者自身が気付かないとは考えにくいからである。

しかし、Q1に見られる改修をシェイクスピア自身が行ったと考えることは困難である。改修は、エピソードの区切りを明確にしているという点では改善と言えるが、Q2やFに見られる、オフィーリアを登場させるために払われた細心の注意が台無しにされているからである。Q1では、シーンの冒頭でオフィーリアの発狂について言及されるが、Q2やFでは、発狂した女がオフィーリアであることが徐々に明らかになるように、周到な準備が施されている。

Q1でFのカットによるほころびが補修されるというのは一見荒唐無稽な話に思われるかもしれない。しかし、『ハムレット』5幕2場174行目からの箇所似たような例が見られる。フェンシング試合の直前にLordがハムレットに都合を再確認するためにやって来て、王と女王をはじめとする宮中の貴族全員がすぐにハムレットが待つ場所にやって来ることを告げる場面だが、ここの約10行分がFではカットされている。Lordの‘The King and Queen and all are coming down.’(5.2.182)という台詞は重要な情報で、これがないと、すぐにフェンシングの試合が始まることが分からなくなってしまい、その後のハムレットとホレイショーのやり取りにうまくつながっていかなくなる。Q1では、オズリックに当たるGentlemanの台詞に、‘My lord, presently, the king and her majesty with the rest of the best judgement in the court are coming

down into the outward palace.’ (17.27-28) という Q2 や F にはない台詞が盛り込まれている。Q1 の基になった台本の制作者は、ここでも、F のカットの結果生じた重要な情報の欠如を認識し、別の箇所の台詞の一部を変更することによってそれを補っているように思われる。この箇所については、改めて論じたいと思う。

本論で主張したように、F の 4 幕 4 場のカット部分は、はじめから、後で何らかの形で情報の欠如を補修することを予定した上でのカットだったということになると、4 幕 4 場前後の F バージョンは暫定的なカットだけが施された、いわば未完成の状態ということになる。このことは重要な意味を持つ。なぜなら、我々は、一部の研究者によって主張されているような、F をシェイクスピア自身による自己完結した revised version とする見方に慎重にならざるを得なくなるからである。F の 4 幕 4 場の周辺には、作者の意図を無視した強引な変更がいくつか見られることはよく知られている<sup>14)</sup>。このことも考え合わせると、F をシェイクスピア自身による改訂版とする作者改訂説はさらに慎重に検証される必要があるだろう。

## 注

- 1) John Dover Wilson, *The Manuscript of Shakespeare's 'Hamlet' and the Problems of Its Transmission*, vol. 1 (Cambridge: Cambridge University Press, 1934; reprint, 1963), 30-31.
- 2) Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, The Arden Shakespeare (London: Methuen, 1982), 56.
- 3) G. R. Hibbard, ed., *Hamlet*, The Oxford Shakespeare (Oxford: Oxford University Press, 1987), 362. Hibbard の意見に対して Jenkins は、ハムレット劇は、最初からハムレットとフォーティンプラスを並べて、ハムレットが ‘dull’ であることを強調する場面に向けて準備がなされていると述べて、2 幕 2 場最後の独白と 4 幕 4 場の独白は、3 幕 4 場の亡霊の再出現を挟む形で、ハムレットの鈍った決意 (‘almost blunted purpose’) を強調しているとして、4 幕 4 場の独白の必要性を擁護している。Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, 139, 参照。
- 4) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History* (Oxford: Clarendon Press, 1955), 317-318.
- 5) The First Folio からの引用と act-scene-line numbering は原則, Ann Thompson and Neil Taylor, eds., *Hamlet: The Texts of 1603 and 1623* (London: Cengage Learning, 2006) による。
- 6) The First Quarto からの引用と scene-line numbering は原則, Kathleen O. Irace, ed., *The First Quarto of Hamlet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998) による。
- 7) *Der Bestrafte Brudermord* からの引用は, Horace Howard Furness, ed., *Hamlet*, New Variorum Shakespeare, 2 vols (Philadelphia: J. B. Lippincott, 1877) に収められた Furness の英訳による。
- 8) W. W. Greg, *The Shakespeare First Folio: Its Bibliographical and Textual History*, 308.
- 9) J. M. Nosworthy, *Shakespeare's Occasional Plays: Their Origin and Transmission* (New York: Barnes and Noble, 1965), 191-192.
- 10) Philip Edwards と Jenkins も Nosworthy の主張に近い立場をとっている。Edwards は、Q2 にのみ見られ、F から削除されたパッセージは Q1 でも欠落していることを指摘した上で、Q1 には削除された部分と響き合うフレーズが 1 つか 2 つあることを認めている。しかし、グローブ座用の上演台

本を用意する過程で、foul-papers から一部の表現が説明のために追加されたことはあり得ないことではないとして、Fでカットされたシーンが上演台本に含まれていたとする Greg の主張に反論している。Philip Edwards, ed., *Hamlet* (Cambridge: Cambridge University Press, 1985), 24, 参照。また, Jenkins も, Q1 のレポーターは ‘nephew to old Norway’ というフレーズが取ってこられたエピソードについてはこれ以上何も知らないようである, と述べて, この表現は, 劇を短縮する際に残しておきたいと思うような断片的な情報であり, 短縮の責任者 (abridger) が削除の過程でそのような情報を残されたダイアログに移植したという考えに傾いている。Harold Jenkins, ed., *Hamlet*, 56, 参照。

- 11) The Second Quarto からの引用と act-scene-line numbering は原則, Ann Thompson and Neil Taylor, eds., *Hamlet* (London: Thomson Learning, 2006) による。
- 12) Q1 では Q2 や F の 4 幕 1 場と 3 場が結合されていて, ハムレットの Corambis 殺害の様子を説明した Gertred がそのまま舞台に留まっている。そして, 追放宣告の後ハムレットと共に King 以外全員が退場する時に, Gertred は King から, ‘Gertred, leave me, and take your leave of Hamlet.’ と, 別れの挨拶をするように勧められる。Q2 や F のように ‘Follow him at foot. / Tempt him with speed aboard.’ と叫ぶクローディアスに比べると, Q1 の King からは, ハムレットの乗船と出国に対してほとんど不安を感じていないような印象を受ける。
- 13) Philip Edwards, ed., *Hamlet*, 31.
- 14) 例えば, Philip Edwards は, シェイクスピアの原稿を book-keeper が清書した transcript には, book-keeper による, 試験的, 暫定的な改修の試みが加えられていることを指摘した上で, F の 4 幕 3 場と 5 場の冒頭においても, book-keeper が配役の節約を重視するあまり, 作者の意図を無視した強引で拙劣な変更を加えていると指摘している。具体的には, 4 幕 3 番冒頭において, Q2 の ‘Enter King, and two or three.’ というト書きを F は ‘Enter King.’ と変更して, クローディアスの 11 行にわたる台詞を独白にしている。独白への変更を擁護する研究者もいるが, 側近との相談は, 4 幕 1 場でクローディアスがすでに予告していたものであり, それを無視したこの F の変更は作者の意図を無視した強引なものに見える。4 幕 5 場冒頭も F と Q2 では微妙に異なっている。Q2 の ‘Enter Horatio, Gertrard, and a Gentleman.’ というト書きが, F では ‘Enter Queene and Horatio.’ と変更されている。それに伴って, F は機械的に Gentleman の台詞を Horatio に, Horatio の台詞を Queen に振り替えている。その際, 台詞を変更せずに, 単純に speechprefix だけを書き換えたために, 特にガートルードの台詞が矛盾したものになってしまっている。多くの研究者は, この変更を嘆かわしい改悪と見なす Edwards の主張に賛成するだろう。しかし一方で Edwards は, 4 幕 4 場のカットに関しては, 作者自身による改訂と見なしており, クロゼットシーンで, ハムレットがローゼンクランツとギルデンスターンに対する応戦の決意を表明する台詞と同時に, シェイクスピア自身によってカットされたものと主張している。Philip Edwards, ed., *Hamlet*, 16-21, 参照。